再就職にチャレンジ!!

目標があれば道は拓かれる そこには個々のドラマがある！

さまざまな理由で離職した後、再就職に挑戦する女性たちの前には、どのような壁が立ちはだかっているのか。そして彼女たちはどのようにそれを乗り越えているのか。

今回はそこにスポットライトを当て、介護老人保健施設で准看護師として働いている白木晴子さんにお話を伺いました。

介護老人保健施設勤務
白木晴子さん

「ああ、この年でもなれるんだ！」

白木晴子さんが看護の仕事に就こうと思い立ったのは、ひとつのある再会がきっかけでした。

それは4年前、久しぶりに会った友人が、「今、准看護師の勉強をしているんです。」と話す言葉が心に強く響いてきたのです。「ああ、この年でもなれるんだ。」と感動すら覚え、家に帰ると、さっそく夫を説得していました。「少しの間、私に投資してくれない？」と。夫は了承してくれ、当時小4と小1だった2人の子どもたちと義母の理解も得、こうして家族全員の支援を得ることができたのです。そして、その2日後には問題集を買い、猛烈な受験勉強を即刻開始したのでした。

「人生一度限りなら！」

その当時、晴子さんはヤマハ音楽講師として働いていたので、仕事をしながらの勉強でした。

音楽講師は25年間続けたやりがいのある仕事でしたが、晴子さんには幼い頃憧れた職業がありました。それが看護師だったのです。

「人生一度限りなら、看護師になりたい。」と、どこかに眠っていた目標が、友人との会話で突然目を覚ましたのです。夜中まで勉強し、就寝は1時半。朝食前にさらにもうひと勉強するため早朝5時には起床するという生活を6月から開始し、その年の11月に帯広市医師会看護高等専修学校を受験して見事合格したのでした。

准看護師の資格取得後、病院で1年間働いた後、実は本当にやりたかったという介護の仕事に就き、現在は介護老人保健施設で働いています。

「社会経験がプラスに！」

45歳の時に始めた挑戦でしたが、「もう少し若い時に始めていたら」と思うことがありました。それは実習の時に「もうちょっと柔軟に」と注意されることが多くあったからです。

「それまでの社会経験が固定観念になっていて、患者さんの捉え方が押し付けになっていたようです。」と晴子さんは分析します。しかし、社会経験がプラスになっている面もあり、それは「いろいろな人と出会っていたことで、垣根なく人と接することができた。」という点です。

現在48歳。介護の仕事に就いて1年余りになる晴子さんは、「こっちに来て悔いは無い。世界が広がるし、視野も広がる。情報が入ってくるし、若い人との交流もある。」と、新しく飛び込んだ世界の魅力について力強く語ります。

～取材を終えて～

「もう年だから」という考え方は、人を束縛し、身動きをとれなくさせるものです。これに限らず、捨て去った方がいい固定観念を人は沢山持っていますが、そのうちの一つでも、どの時点かで、ひょいと気付くチャンスがあれば儲けものです。気付けば解放されて、伸び伸びと生きることもできるからです。「ああ、この年でもなれるんだ」と気付き、そして行動を起こした白木晴子さん。ひとごとながら、共に解放感を覚え、爽快になりました。